226　三崎殿山古墳（みさきとのやま）

－西伯耆最大の前方後円墳－

所在地

西伯郡南部町三崎字北山崎

立地

法勝寺川と小松谷川に挟まれた成美平野に位置する独立丘陵（通称・殿山）の頂部に立地。

時期

不明。古墳時代中期前半に位置付ける意見が主流であるが、前期古墳と考える意見もある。

発見と調査

『因伯二國に於ける古墳の調査』（文献1）には言及がなく、大正時代には認識されていなかったと考えられる。1950年代に佐々木古代文化研究室の活動で分布調査や測量調査が行なわれ、全長110ｍの前方後円墳として認識されはじめたが（文献2）、その頃には三崎４号墳と呼ばれていた（現在の遺跡地図上の登録名は三崎10号墳）。その後、改訂された墳丘測量図が米子市史に掲載された（文献3）。

これまでに、発掘調査は実施されたことがなく、埋葬施設や副葬品などの情報もない。

図１　三崎殿山古墳実測図

遺跡の種類

前方後円墳。町指定史跡（1971年（昭和46）11月３日）。

遺構と遺物

全長108ｍ、後円部径58ｍ、高さ８ｍ、前方部幅35ｍ、高さ６ｍの前方後円墳と認識されてきたが、当然ながら、墳端をどこと判断するかによって数値は大きく変わる。前方部前面や後円部の一部を大きく開削する山道や堀切によって、墳端を捉えにくかったが、新たな測量図によって、認識が進む部分がある。

すなわち、北側くびれ部の後円部から前方部へ移行するラインは標高76ｍあたりで周囲の平坦面と比較的明瞭に区別できそうである。この傾斜変換点を判断基準とすると、同様な高さで前方部前面の平坦面と墳丘を区別できそうであり、南側で前方部の平面形が直線的な様相を呈することを確認しつつ、南側くびれ部でも、ほぼ同

様な位置と高さで後円部に移行すると観察できる。

後円部では、山道のために東側墳端が削平されている可能性もあるが、道の東側に残存する高まりの一部を墳丘と捉えるならば、全長約 85 m と判断することになる。その場合、後円部径は約 45 m、前方部幅は約 20 m となり、いわゆる「柄鏡形」の前方後円墳を復元することとなる。標高 78 m 付近の緩斜面を評価すると、後円部は 2 段築成と考えられるが、前方部は積極的に段築成と判断できる場所はない。古墳の側面観は、高い後円部に対して、低平な前方部を呈するもので、「前期的」である。

円筒埴輪や土器の存在が各所で言及されているが、資料が明示されたことがないため、よくわからない。現地では土師質土器を採集することができるが、埴輪であるか、土師器であるか判断がつかない細片が多い。突帯やハケメやスカシなど、埴輪と断定しうる破片はなく、器壁も薄いものが多いから、現状では、埴輪の存在は積極的に評価できないであろう。

なお、葺石は、墳丘各所の削平にも関わらず見られないことから、存在しない可能性が高い。

墳丘形態が柄鏡形を呈すること、円筒埴輪の存在が明確でないこと、葺石が存在しないことなどを考慮すると、近年実態が知られてきた前期古墳の類例と共通し、三崎殿山古墳も前期に位置付けられる可能性もあると思われる。いずれにしても、正確な墳丘規模や埴輪の有無は、今後の調査に委ねるべきであろう。

特徴と意義

正確な規模について、断定的な記述はできないものの、西伯耆最大の前方後円墳であることは疑いない。新たな墳丘測量図により、低く狭長な前方部形態となることがより明確となったが、それが本来の形状であるかどうかや、埴輪・葺石等の諸要素が伴うか否かによって古墳の評価は変わってくる。再検討の余地が大きいと言えよう。

現状と遺物

古墳は南部町指定史跡として保存されている。ただし、植林された広葉樹の成長が進み、墳丘の観察が困難になりつつある。遺物は、個人蔵の土師器片などが知られているが、器種や時期の判断を下しうるものはほとんどないというのが実情である。

文献

1. 梅原末治 1924『因伯二國に於ける古墳の調査』鳥取縣史蹟勝地調査報告第二冊　鳥取縣
2. 佐々木古代文化研究室 1959「鳥取県前方後円墳地名表 (1)、(2)」『ひすい』66、67（地名表は第 66 号に、墳丘測量図は第 67 号に所載）
3. 米子市史編さん協議会 1999『新修米子市史』第 7 巻資料編考古　原始・古代・中世、米子市

（髙田　健一）